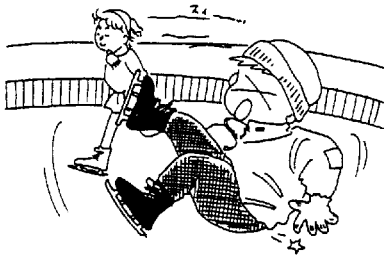
全日本育成会「手をつなぐ」
1997年12月号より
佐賀時代の地域活動の1つです



氷上にふれあいの輪

川崎市　手をつなぐ編集委員会
明石洋子

たくさんの人をまきこんで

「障害児のためのアイススケート日曜学級」が今年も一一月二四日から佐賀市の佐賀スポーツセンターで始まります。年月のたつのは早いもので、今年で一六回目を迎えました。

今から一七年前に主人の転勤で引っ越した佐賀は、障害者と地域との交流が少なくて、それでも私は「障害があっても当たり前に地域の中で」と願っていましたから、ふれあいを求め生きる場所を少しでも多くと願い、当活動を始めました。五年間の佐賀での生活の後、川崎に戻った今でも、佐賀県自閉症児親の会の後輩の役員さんたちがこの活動を継続し、毎回楽しい感想を寄せてくださいます。

一五回目の世話人の梅田ひとみさんは「最初リンクに入るのも嫌がり、氷の上で怖がってボランティアさんにしがみついていた子どもたちが、みんな驚くほどにスケートが上達し、大勢の中で楽しむことができるようになりました。回を重ねるごとに参加者も増え、スケートを通して結ばれたふれあいの輪は、着実にこの佐賀の地に広がり、障害児やその家族が勇気をもって地域社会に飛び出していく力になっています」とうれしい報告をくれました。

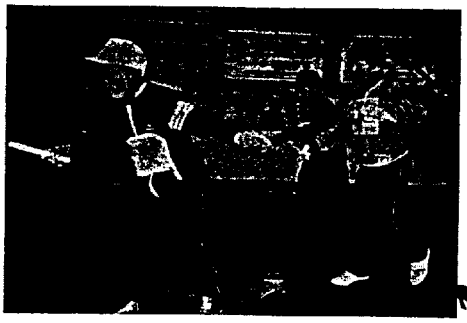
「ふれあい、理解しあい、共に楽しもう」を目的とすると記した毎回の案内文は当時の私の趣旨文そのまま。思えばこの活動は私の長男（当時小三）が「アイス」という言葉を発してスポーツセンターに行きたがったのがきっかけでした。「本人の意思を尊重する」をモットーに子育てをしている私ですが、超多動の彼がアイススケート場でどのような行動に出るか予想がつかず、とりあえず私と次男がスケートをマスターして、どんなハプニングにも対応できるようにと連日スケート場に通いました。そうしてスポーツセンターの方々と親しくなり、熱心に通う理由を聞かれ、「障害のある人がスケートをするのに、家族がそんな努力をしているなんて知らなかった。他の子もそうなのか。それなら貸し切って思いっきりスケートしたら」と勧められました。

当時自閉症児親の会の子どもの多くは寄宿制の養護学校に通っており、帰宅する休日の過ごし方が親の悩みの種でしたので、皆に声をかけました。しかし、新しいことには慎重で、「親はもちろん兄弟児でさえも滑れないのに、自閉症児ができるわけない。そんな大変な活動はやらない」と賛同してもらえませんでした。

しかし長男は、スポーツセンターの前を通るたびに盛んに「アイス」と言い、それで貸し切りの会場費は自腹を覚悟し、企画や運営やスケート指導は、地域の小学校のＰＴＡや婦人スケート愛好会のピンクシャーベットとペンギンクラブに、マンツーマンで障害児と遊ぶのは学生ボランティアサークルの有明会や養護学校や施設や病院の先生方にと、周りの人脈すべてに声をかけ組織作りから始めました。

親の会の人には「せめて兄弟児でもスケートさせたら」とお誘いしました。こんなわけで、障害児より健常児やボランティアの方が多いスタートでしたが、新聞やテレビで報道される度に、「我が子にもスケートする機会を与えたいので参加したい」と佐賀

クラスメート 徹之



↑手をとりあっての氷上フォークダンス
←氷上運動会、白熱のリレー

徹之

県各地から希望者が殺到するようになりました。

私は運動不足解消と公共の場に積極的に飛び出す機会になればと、障害の種類や程度に関係なく受け入れました。スケート靴を拒否する子には長靴でソリ遊びを、また宝つりゲーム等氷上で楽しく遊べるよう工夫しました。そのうち「平衡感覚形成に効果があり、療育の一役になる」との専門家の推薦や、参加した兄弟児から「楽しいからお母さんもお兄さんを連れてスケートしよう」と誘われ、親の会の人たちも自閉症児にさせてみようと重い腰を上げてくれました。子どもが変わるとお母さんの方がむしろ熱心になって……。

氷上から地域へ

ところで、この活動の予想外のメリットは、協力者がいつもの福祉や教育の専門家や学生さんたちだけでなく、地域の主婦の方々がボランティアになり、地域の子どもたちも多数参加していたことから、氷上だけでなく、地域に戻っての日常生活でも支援者になってくれたこと。最初は驚きや戸惑いや同情があったとしても、毎回ふれあうことで理解を深め、援助の仕方が自然に身につき、地域生活も支援してくれました。また、有明会の学生さんたちや子どもたちの多くが、現在専門家やなんらかの障害児と関わりのある仕事に就いており、障害児が成人した今でも各地で支援してくれるのもうれしいかぎりです。

当時は、婦人スケート愛好会の会員が、土曜日に有明会の学生さんたちにスケート指導をし、日曜日に障害児にと、土日開催で多忙な日々でした。また自閉症に対する誤解（心因説）から親は冷たい視線を浴び、心ない人からは「障害児にスケートさせたって障害がなおるわけじゃなしむだなことを」と言われたりして、あたりまえにスケートしたいだけでしたが、必要に迫られ、趣旨文を作り目的を理解してもらわねばなりませんでした。

継続は力なり

「継続は力なり」の言葉どおり一六回目になった今は後援も協力団体も増え、練習用のスケート券（招待券）も豊富に頂き、参加費も冬期一シーズン（一〇回くらい）親子で五〇〇〇円、兄弟児と一般参加者は一回五〇〇円、希望者が多数（一回平均二〇〇名）で運営も安定の由。今年度の世話人の山田英子さんは「五年前はスケート靴を履くのさえ嫌がっていた娘（小四）に、今ではボランティアの方がそのスピードについていけなくって」とうれしい悲鳴を上げる始末。「スケートをさせたくて親の会に入会」という参加者もいて、現在は親の会が九割を占めて一般参加者の大半は断らざるをえない状態とのこと。地域の人の出番が少なくなっているのが残念です。また子どもの方が上達してしまい、ボランティアのスケート技術が後手になり、今回は一一月一六日からスポーツセンターのコーチの特訓があるとか。

さて最後に一言、わが長男の「アイス」の本当の意味はアイススケートではなく、なんとアイスクリーム！　私の勘違いからスタートしたこの活動でしたが、今も多くの障害児の余暇のＱＯＬ（生活の質）を高めているようです。今年も楽しんでください！